

ブラジル農業における日系人の貢献と日本の国際協力

(The contribution of Japanese ancestry and Japanese international cooperation
in Brazilian agriculture)

○田澤 裕之*

(TAZAWA Hiroyuki)

1. はじめに・・・日伯交流 100 周年

2008 年は、日本ブラジル交流 100 周年の年である。1908 年に日本人移住者が、神戸港から笠戸丸でサンパウロに向けて出港してから 100 年がたった。これを記念して、今年を「日本ブラジル交流年」として両国において幅広く交流年事業を行うこととしている。

日本人移住者は、ブラジルにおける各方面で大きな貢献をしてきたが、二世、三世は、高い教育を受け、閣僚や下院議員を出すなど、ブラジル社会の多方面で活躍している。現時点で日系ブラジル人は約 150 万人を数え、世界の日系人の約 60% を占める最大の日系社会を築いている。

2. ブラジルの農業と日系人・・・これまでの 100 年

ブラジルの農業は、サトウキビ、大豆等の農作物の生産量が世界一など鉱物資源も合わせて世界有数の資源大国である(下表)。最近では、サトウキビ(写真)からのバイオエタノール生産により、世界のバイオエタノール生産量(約 5,100 万キロリットル)のうちブラジルが占める割合は 34.7% でアメリカ合衆国(38.7%)に次いで第 2 位であるが、輸出量は 343 万キロリットル(2006)あり、それ以外の国は、ほとんど輸出なしの状況である。

このような生産規模を誇るブラジル農業において、日本人移住者の果たした役割は大きい。その活躍はやはり農業から始まったといわれ、ブラジル国内に自営農移住者のための農業集団移住地を築き、拓殖組合を創設するなど、相互に助け合いながらブラジル農業の発展に尽力してきた。また、日本の農業技術を活用した技術協力により、カボチャやリンゴなどの新品種や都市近郊における集約的農業、総合農協方式の導入などの技術移転が確立、定着している。

出展: USDA

2006 年	世界ランキング(位)	
	生産量	輸出量
砂糖	1	1
コーヒー	1	1
オレンジジュース	1	1
大豆	2	1
牛肉	2	1
タバコ	2	1
アルコール	2	1
鶏肉	3	1
トウモロコシ	3	4
豚肉	4	4



表：ブラジル農畜産物の生産及び輸出世界順位

写真：サンパウロ州のサトウキビ畑

*農林水産省大臣官房国際部国際協力課 The Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries of Japan
国際協力、技術協力、研究交流

3. ブラジル農業における日本の国際協力・・・資金及び技術協力

日本とブラジルにおける ODA 等による国際協力において、セラード開発は重要なプロジェクトであった。ブラジル内陸部の何も育たない「不毛の地」とされていたセラード地域において JICA 開発投融資事業「日伯セラード農業開発協力事業」が 1979 年から約 20 年間実施され、大豆生産はアメリカ合衆国に次いで第 2 位の生産量を占めるに至った。その際、日伯セラード開発公社を設立し、日系社会ネットワークを背景に、プロジェクトの進捗を営農・普及面も含め運営・管理した。

また、灌漑排水施設等の生産基盤整備関係の国際協力では、技術協力プロジェクトとしてサンパウロ州で農業基盤整備を実施した「リベイラ河流域農業開発計画(1975～1984)」がある。有償資金協力として、セラード地域の耕地にスプリンクラー等の灌漑設備を導入し小麦等増産を図った「セラード灌漑計画：1983」やバイア州及びベルナンブコ州において灌漑及び道路等のインフラを整備した「東北灌漑計画：1989」、ミナスジェライス州において灌漑施設の造成、農業信用等を行う「ジャイバ灌漑計画：1989」があり、ブラジルにおける農業開発の重要な位置を占めている。

4. 今後の展望・・・日系ネットワークを活用したブラジルとの研究・技術協力

ブラジルにおいて、このような日系人の農業分野における実績とともに農科大学・研究機関も含めた強固な日系ネットワークが存在する。今後のブラジルとの研究技術協力の課題としては、これらのネットワークを活用し、従来からの作物の育種改良、生産基盤や家畜資源・育種に関する分野から、地球環境問題、食料安全保障、循環型農業の普及など多様なテーマについて研究技術協力を進めていくことが考えられる。

例えば、地球温暖化対策の切り札として、現在、輸送用バイオ燃料の需要が急激に高まってきている。バイオ燃料に係る研究技術については、原料が自給可能で、世界一のエタノール生産国として、ブラジルは、先進的な研究・技術を有しているが、サトウキビや大豆の世界的な高まりを背景に、それらの作物の集中的・集約的な栽培が行われるとともに食料とエネルギーの競合が生じていることが問題となっている。

土地など資源が豊富な国で対象となる作物のみを集中的に栽培することによって生産費を低く抑え生産方式は、ブラジルのような場合、国内の環境に問題が生じるだけでなく、地球規模の環境もかく乱するおそれが生じる。

したがって地球環境問題や食料安全保障への対応を図るとともに自然の循環機能を適切に活用する健全な農業生産活動を日本・ブラジル両国の研究技術協力により確立する必要がある。そのためには、両国間で知見・事例の収集、情報の交換を行い、研究技術交流・協力の定着を図る。また、より交流を深めるための場としてシンポジウム等を開催し、農業研究技術協力に係る情報の交換を行うとともに、相互の協力関係を強化する必要がある。

5. その先へ・・・

ブラジルはポルトガル語圏アフリカ諸国を中心に積極的に開発援助を展開している。日本も TICADIV（第 4 回アフリカ開発会議）が 5 月に開催され、アフリカ支援を積極的に展開している。共通の目的をもつ日本が先の農業分野における日系ネットワークを活用しつつブラジルと連携して南南協力を推進することは、今後 100 年を考えるうえで重要である。